

「葵の上に取り憑く物の怪」指導メモ

●本文（教育出版「精選古典B」）

葵の上に取り憑く物の怪

まださるべきほどにもあらずと、皆人も弛み給へるに、にはかに御気色ありてなやみ給へば、いとどしき御祈り数を尽くしてせさせ給へれど、例の執念き御物の怪一つ、さらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともてなやむ。さすがにいみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるへ給へや。大将に聞こゆべきことあり。」とのたまふ。「さればよ。あるやうあらむ。」とて、近き御几帳のもとに入れ奉りたり。むげに限りのさまにものし給ふを、聞こえ置かまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮も少し退き給へり。加持の僧ども声静めて、『法華経』を読みたる、いみじう尊し。

御几帳の帷子引き上げて見奉り給へば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へるさま、よそ人だに、見奉らむに、心乱れぬべし。まして、惜しう悲しう思す、理なり。白き御衣に、色合ひいとはなやかにて、御髪のいと長うこちたきを引き結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手を取らへて、「あないみじ。心憂き目を見せ給ふかな。」とて、ものも聞こえ給はず泣き給へば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御目見を、いと弛げに見上げてうちまもり聞こえ給ふに、涙のこぼるるさまを見給ふは、いかがあはれの浅からむ。

あまりいたう泣き給へば、心苦しき親たちの御ことを思し、また、かく見給ふにつけて口惜しうおぼえ給ふにやと思して、「何ごとも、いと、かう、な思し入れそ。さりとも、けしうはおはせじ。いかなりとも、必ず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣・宮なども、深き契りある仲は、巡りても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ。」と慰め給ふに、「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばし休め給へと聞こえむとてなむ。かく参り来むとも、さらに思はぬを、もの思ふ人の魂は、げにあくがるるものになむありける。」と、なつかしげに言ひて、

嘆きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよ下交ひの褻

とのたまふ声・けはひ、その人にもあらず変はり給へり。いとあやしと思し巡らすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることと、聞きにくく思してのたまひ消つを、目に見す見す、世にはかかることこそはありけれと、疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど、誰とこそ知らね。確かにのたまへ。」とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るも、かたはらいたう思さる。

●本文分析

葵の上に取り憑く物の怪

①まださるべきほどにもあらずと、皆人も弛み給へるに、

- (S) にはかに御気色ありてなやみ給へば、
(S) いとどしき御祈り数を尽くしてせさせ給へれど、
例の執念き御物の怪一つ、さらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともて
なやむ。
- ② (S) さすがにいみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるへ給へや。
大将に聞こゆべきことあり。」とのたまふ。
- ③ (S) 「さればよ。あるやうあらむ。」とて、近き御几帳のもとに (誰ヲ) 入れ奉
りたり。
- ④ (S) むげに限りのさまにものし給ふを、
聞こえ置かまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮も少し退き給へり。
- ⑤ 加持の僧ども声静めて、『法華経』を読みたる、いみじう尊し。
- ⑥ (S) 御几帳の帷子引き上げて見奉り給へば、
(S) いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へるさま、よそ人だに、見奉ら
むに、心乱れぬべし。
- ⑦ まして、(S) 惜しう悲しう思す、理なり。
- ⑧ (S) 白き御衣に、色合ひいとはなやかにて、御髪のいと長うこちたきを引き結ひて
うち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。
- ⑨ (S) 御手を取らへて、「あないみじ。心憂き目を見せ給ふかな。」とて、ものも聞
こえ給はず泣き給へば、
(S) 例はいとわづらはしう恥づかしげなる御目見を、いと弛げに見上げて (誰ヲ)
うちまもり聞こえ給ふに、
涙のこぼるるさまを (S) 見給ふは、いかがあはれの浅からむ。
- ⑩ (S) あまりいたう泣き給へば、
心苦しき親たちの御ことを思し、また、かく (誰ヲ) 見給ふにつけて口惜しうおぼえ
給ふにやと (S) 思して、
「何ごとも、いと、かう、な思し入れそ。
さりとも、けしうはおはせじ。
いかなりとも、必ず逢ふ瀬あなれば、
対面はありなむ。
大臣・宮なども、深き契りある仲は、巡りても絶えざなれば、
あひ見るほどありなむと思せ。」と慰め給ふに、
(S) 「いで、あらずや。
身の上のいと苦しきを、
しばし休め給へと聞こえむとてなむ。
かく参り来むとも、さらに思はぬを、
もの思ふ人の魂は、げにあくがるものになむありける。」と、なつかしげに言ひて、
嘆きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよ下交ひの棲
とのたまふ声・けはひ、その人にもあらず変はり給へり。

- ⑪ (S)いとあやしと思し巡らすに、
ただかの御息所なりけり。
- ⑫ (S)あさましう、人のとかく言ふ〔こと〕を、よからぬ者どもの言ひ出づることと、
聞きにくく思してのたまひ消つを、
目に見す見す、世にはかかることこそはありけれと、疎ましうなりぬ。
- ⑬ (S)あな心憂と思されて、
「かくのたまへど、誰とこそ知らね。確かにのたまへ。」とのたまへば、
ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。
- ⑭ (S)人々近う参るも、かたはらいたう思さる。

●生徒予習用プリント

訳出ポイント 「葵の上に取り憑く物の怪」

214 ページ

- 2 なやみ給へば * 誰がか。
- 2 いとどしき御祈り～せさせ給へど * 誰がか。
- 4 調ぜられて * 誰が、誰にか。
- 4 少しゆるへ給へや * 何をか。
- 5 とのたまふ。 * 誰がか。
- 5 さればよ、あるやうあらむ * 誰の発言か。なぜ「あるやうあらむ」に敬語がないのか（7行目の「聞こえ置かまほしきこともおはするにや」と対比して考えよ）。
- 6 入れ奉りたり * 敬意の対象は。
- 6 限りのさまにものし給ふ * 誰がか。
- 7 聞こえ置かまほしきこと * 誰が、誰にか。
- 9 見奉り給へば * 敬語と敬意の対象は。
- 9 御腹はいみじう高うて臥し給へるさま * 誰の、どのような様子か。
- 10 見奉らむに * 文法的意味は。
- 10 惜しう悲しう思す * 誰がか。
- 11 白き御衣に * どこに掛かるか。
（何の）色合ひいとはなやかにて
- 15 うちまもり聞こえ給ふに * 敬語と敬意の対象は。
（誰の）涙のこぼるるさまを（誰が）見給ふは

215 ページ

- 1 泣き給へば・思し・見給ふ・おぼえ給ふ * 誰がか。
- 2 と思して * 「と」の受ける範囲。 * 「思し」は誰がか。
- 3 いかなりとも * どういう意味か。
- 3 逢ふ瀬あなれば * 文法的意味は。
- 3 対面はありなむ * 誰と誰の対面か。 * 「なむ」の文法的説明。
- 4 絶えざなれば * 単語に分け文法的に説明せよ。

- 6 しばし休め給へ * 何をか。
- 6 聞こえむとてなむ * 「聞こえむ」は、誰が、誰にか。 * 下に続く内容は。
- 7 あくがるるもになむありける * 文法的意味は。
- 9 「嘆きわび」の歌 ①句切れ ②修辞・構造 ③「思い」が述べられている語
④どのような思いか ⑤イイタイコト
- 10 その人 * 誰か。
- 11 思しめぐらす * 誰がか。
- 11 あさましう * どこに掛かるか。
- 13 かかることこそはありけれ * 「かかること」の内容は。 * 文法的意味は。
- 13 あな心憂 * 文法的説明は。
- 13 思されて * 文法的意味は。
- 14 ただそれなる御ありさま * どういうことか。
- 15 かたはらいたう思さる * 誰が、なぜか。

●指導メモ

■第一段落

<導入>

0 あらすじ解説

- 源氏十七歳 惟光参上し、夕顔の遺骸を東山に送る。
源氏、二条院に帰る。
秘密裏に夕顔の葬儀を行い、右近を二条院に引き取る。
- 紫の上との出会い。紫の上を引き取る。
藤壺、若宮（後の冷泉帝）出産、中宮となる。
桐壺帝、朱雀帝に譲位。
源氏、東宮（藤壺と源氏の子）の後見となる。
- 源氏二十二歳 葵の上懐妊。
六条御息所、斎宮に選ばれた娘とともに伊勢下向を決意。
新斎院（桐壺帝の三の宮）の御禊の日、車争い。
賀茂祭の当日、紫の上と同車して見物。

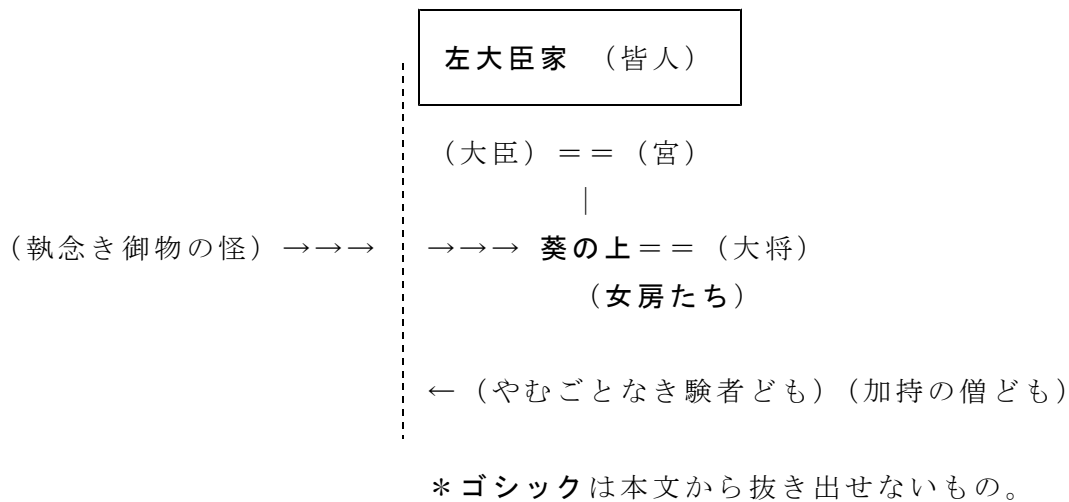
1 音読

2 傍線部の動作主を考える。

目的：登場人物を見つける、敬語の使われ方を確認する

- ①悩み給へば
- ②（御祈り）せさせ給へれど
- ③とのたまふ。
- ④入れ奉りたり。
- ⑤限りのさまにものし給ふ

<展開>



2 動作主を考える。

①葵の上 ②大臣 ③葵の上（御物の怪） ④女房たち ⑤葵の上

*①葵の上には尊敬語が使われる。

*②左大臣家なので一応左大臣。

*③語っているのは物の怪だが、葵の上の口から出る言葉なので敬語がつく。
なお、物の怪に最初から「御」がついているのは、葵の上に対する敬意。

*④尊敬語がなく、謙譲語のみ。

「あるやうあらむ」に尊敬語がない。女房たちは③の主語が物の怪であることに気づいている。

*⑤大臣や宮は気づいておらず、あくまで葵の上の言動と考えている。

*発問例 1 ①～⑤のうち、尊敬語がないものはどれか。

→④

発問例 2 「あるやうあらむ」と推量しているのは誰か。

→葵の上の女房

発問例 3 「あるやうあらむ」と対応する推量はどれか。

→「聞こえおかまほしいこともおはするにや」

発問例 4 両者の文法的な違いは何か。

→尊敬語の有無

発問例 5 「聞こえおかまほしきこと～」と推量しているのは誰か。

→大臣と宮（葵の上の父と母）

発問例 6 このことから何が分かるか。

→女房たちは「少し～ことあり」の発言主を葵の上とは考えていない。
生き霊の正体を源氏と関係のある六条御息所と予想している。

<まとめ>

3 重要語・助動詞などに注意して現代語訳を考える。

*物の怪の調伏について、枕草子（「すさまじきもの」）や『王朝文学文化歴史大辞典』（笠間書院）の「物の怪」の項（プリント配布）を参照して簡単に説明する。ちなみに、『王朝語辞典』（東京大学出版会）の「物の怪」の項は、藤井貞和先生がご執筆で、この場面の例も採り上げられており我々には面白いが、生徒用としては多少専門性に過ぎる印象である。

■第二段落

<導入>

1 音読

2 傍線部の敬語の敬意の対象を考える。

目的：二方面への敬語に注目して、人物関係を確認する。

- ①見奉り給へば
- ②臥した給へるさま
- ③ものも聞こえ給はず泣き給へば
- ④うちまもり聞こえ給ふに
- ⑤見給ふは

<展開>

3 場面の確認

*産室では、産婦や女房の装束、また調度類も白一色にするのが慣例。

*お腹が大きな状態で横になっている。髪をまとめている。

= 「かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれ」

←→「例はいとわづらはしうはづかしげなる御まみ」

4 敬意の対象を考える。

- ①奉り＝葵の上 給へ＝源氏
- ②給へ＝葵の上
- ③聞こえ＝葵の上 給は・給へ＝源氏
- ④聞こえ＝源氏 給ふ＝葵の上
- ⑤給ふ＝源氏

*④から⑤の間に接続助詞「に」があり、主語が葵の上から源氏に変化する。

*「うちまもり聞こえ給ふ」は、実は物の怪が源氏を見つめている様子である。

<まとめ>

5 重要語・助動詞などに注意して現代語訳を考える。

■ 第三段落

< 導入 >

1 文法

- ① 逢ふ瀬あなれば 絶えざなれば
御息所なりけり あさましとは世の常なり
疎ましうなりぬ

* 「あ・な・た・ぎ・か」 + 「なり」 = 推定・伝聞

- ② 対面はありなむ
聞こえむとてなむ あくがるるものになむありける

2 傍線部の主語を考える。

- ① 泣き給へば
② 思し
③ かく見給ふ
④ 思して
⑤ 変はり給へり
⑥ 思し巡らすに
⑦ のたまひ消つを
⑧ 疎ましうなりぬ
⑨ のたまへど
⑩ のたまへば

* 第三段落は登場人物が源氏と葵の上（六条御息所）の二人なので、「ば」でも主語が変わることが多く、「を・に・ば・逆接」を丁寧にたどるよう指示する。

< 展開 >

3 心内語 5箇所「」をつける。

目的：心内語では自分に敬語をつけない → 主語を（敬意の方向を）考えるヒントになる

4 主語を考える。

- ① 給へ = 葵の上
② 思し = 葵の上
③ 給ふ = 葵の上
④ 思し = 源氏
⑤ 給へ = 葵の上（六条御息所）
⑥ 思し巡らす = 源氏
⑦ のたまひ消つ = 源氏
⑧ なりぬ = 源氏
⑨ のたまへ = 六条御息所
⑩ のたまへ = 源氏

* 先に①～④の答え合わせをやってから「」をつけさせ、誤答の理由を考えさせてもよい。

* ①、④は地の文。

②、③源氏の心内語の中なので、尊敬語がつく動作は葵の上。

⑤「その人」は葵の上。「変はり給へり」に注目すれば六条御息所。

⑧尊敬語があってもよいところ。

⑨源氏の発言なので、心内語同様、尊敬語がつく動作は六条御息所。

⑩地の文で語り手から源氏への敬意。

5 源氏の最初の励ましの分析

* 前半＝死なないだろう

後半＝死んでも来世で再会できるだろう

* 「いかなりとも」＝死の婉曲表現。

6 和歌について考える

①句切れは？

→四句切れ（*命令形）

②修辞・構造は？

→倒置（嘆きわび空に乱るるわが魂を／結びとどめよ。／下交ひの棲（ヲ結ンデ））

③思いが述べられているのは？

→「嘆きわび」「結びとどめよ」

④表面上は何を「結びとどめよ」なのか？

→わが魂

⑤なぜ「結びとどめよ」なのか？

→魂が自分の意志とは無関係に身体からさまよい出てしまっているから。

* 「あくがるる」「空に乱るる」

⑥なぜ「あくがるる」「空に乱るる」なのか？

→「嘆きわび」

⑦何を「嘆きわび」なのか？

→*源氏の愛情が薄いことを

*葵の上との一件を

<まとめ>

7 重要語・助動詞などに注意して現代語訳を考える。